銀魂～クロスオーバー乱舞～ 混ぜりゃ面白い時だってある！！

イビルジョーカー

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日、万事屋を営む坂田銀時は、おそ松家の三男に長男・おそ松の様子がおかしいと相談するのだが……。

※この小説は作者が銀魂キャラ、ついでにおそ松さんの六子たちがプリキュアに憑依する形でクロスしたら面白いんじゃね？的な幼稚な発想から生まれた産物です。ついでに銀魂がジャンプ本誌から消え去ったショックもあります。

更についでに言えば、他の作品クロスもしてみたかったからやってもうた！　みたいな部分もあります。こんなにしちゃってカオス極まりないとは思

いますが、面白おかしく、時にＳＦ人情劇な銀魂物語を見て頂ければ幸いです。

目　次

第1訓『君の名は』を見て、最高だと思った日を僕は忘れない　――――――　1
バカが集まると大抵碌なことがない。　15

第1訓『君の名は』を見て、最高だと思った日を僕は忘れない

侍の国、僕らの国がそう呼ばれていたのは……。

「おい、もういいだろこの下り」

「そうね。いちいちこんな説明しなくていいアル。読者もきっと呆れてる筈ヨ」

「いや、そんな身も蓋もない話しないで下さいよ。一応知らない人もいると思いますし…

…」

「おいおい、ぱっっぁんよお～。これ二次創作の有名サイトだろ？　このサイトをご利用している方々はもう銀魂なんて知ってるからね。全然考慮なんて必要ねーよ。今年で実写化第2弾までされてる俺達を知らない奴なんていないって」

「そうネ。それなのに知らない奴は見るなって話アル」

「なに喧嘩売るような事言ってんの?!苦情来ますよ!!」

「苦情だぁ？　なめんじゃねーよ。俺達はこれまで、幾多の敵を相手にして来たんだよ。東○とか、子供の教育に悪いだ何だと騒ぐ○○○○会とか!!」
「ちょっとおおおおお!!!!!　それダメな奴ですから！　敵に回しちゃいけない人たちですからね!!」
「でも、東○に関してはもう敵に回したも同然アル。色々仕出かしたし」
「いや、それはまぁ諸々あったけども！　でもその件はとっくに解決したし……」
「つまりもう怖いものは無しだな。じゃー、思い切って○○とか、○○○や、○○○○もやってみるか」
「伏字だらけじゃねぇか!!　何をやらかす気ですかアンタは!!」
「まぁ、こんな所で恒例のグダグダ会話続けるのもアレだから、そろそろ本編行くか！」
「「銀魂～クロスオーバー乱舞！～　混ぜりゃ面白い時もある！　開幕!!」」

※

万事屋銀ちゃん。

簡単に言えば何でも屋のそれだが、その店主である坂田銀時は木製の事務用机の椅子に腰を落とし、そして死んだ魚のような目が特徴的な締まりのない顔に心底うんざりとした表情を浮かべている。

「何としてくれよ銀さん!!　マジでヤバいんだって!!」

理由は万事屋からそう遠くない松野家の六つ子の１人、三男のチョロ松が原因だった。きっかけは１０時頃。いつものように客足はろくになく金になるような話も入ってこない暇過ぎる状況の中でジャンプを見ていた時、チョロ松はやって来た。

しかし来て早々、顔は切迫詰まるとばかりに慌てた様子で落ち着く気はないに等しかった。

とりあえず。このままではまともに話を聞けなかったのでチョロ松の顔面めがけ蹴りをぶち込み、やや強引ながらも鎮静させた銀時は改めて事情を聞いたのだが……。

「考えてもみてよ。あのクソ長男だよ?　エロのエロ、もうエロの帝王にでもなった方がいい位のエロさと全っっ然働く気もないニート。そして平然と他人を裏切ったり、人の事なんか御構い無しの無神経さ!!　まるで、クズを寄集めて出来たようなクズの化身!!　そんなおそ松兄さんが……」

ダンッ!

「普通に何気なく荷物の多さに困ってるお婆さんの荷物を持ったり、迷子の子供を見つけて交番まで送り届けたり、時には親の人探したりとかして。それで家事とか掃除をしたり……色々おかしいんだよ!!」

机をこれでもかと思いっきり叩き、自分の兄にして長男であるおそ松に対して散々な感想を述べ立てる。たが、後半に関しては別にどうと言う事ない普通過ぎる親切な行動のためか、銀時の顔はやはり呆れ顔を崩さない。

「おかしいのはお前だろ。つーか、前半の部分に関しては同類だろーがシコ松」

「シコ松言うなァァッ!! ともかくおかしいんだよ! おそ松兄さんがそんな事するような人間じゃないって、知ってるだろ?!」

「オメーもな」

人間としては非常に当たり前で良い事なのだが、それを自主的に実行することがないのが松野家の六つ子たちだ。

クズ、エロ、ニートという三拍子を完璧に持ち合わせた彼等は人として落ちまくった存在と言える。

そんな彼等の長男ことおそ松が何気なくやる、それも自主的にというのがチョロ松や他の六つ子達にとっても驚愕の一言に尽きるのである。

「アレだろ? ようやっと自分自身のダメさに気づいて目覚めたって感じだろ? 考え

てもみろよ。お前らは誰がどう見てもニート、いやニート以下の穀潰しの寄生虫みたいなもんだろ？　そりゃあ『そうだ。このままじゃいけない！』ってなるよ。うん。だから、おそ松も生まれ変わったんだよ。よかったじゃねぇか」

「よくあるかアアッ!!　アンタ僕たちの事をそんな風に見てたの？　思ってたの？　傷つくはッ!!!!」

「ともかくこれでよかったんだよ。真人間になるってことは、良き社会人になるも同義なんだから。お前らも見習って早くニート脱却しろシコ郎」

「チョロ松だって!!　つーか、もはや誰?!　僕の存在がなくなってんだけど！」

チョロ松の非難を軽く流し、耳を小指でほじくる銀時の顔はめんどくさいの文字がありありと浮かぶほど、どーでもよさ気な雰囲気のそれだ。

まともに相手するだけ無駄と判断されているのだろう。

「いやいや、ダメなんだって!!　あんな調子じゃ今後どう接していいのか分かんないって!!　それになんか最初の頃自分は誰だとか、妹云々言っちゃってるし！妄想と現実が曖昧になって、もう病気だよアレは!!」

「どーせギャルゲーの主人公的なキャラ作りだろ。妹萌えタイプに行こう的な。

お前だってやりそうだし、つーかやるんだろ？」

「やらねーよ！　イタ過ぎるわッ!!」

もやは聞くつもりはないのか。

銀時はギャーギャー喚くチョロ松を置き去りに店から出ると停車しておいた愛用の銀の字印のスクーターに乗り、切らしていたイチゴ牛乳を買う為にエンジンを鳴らし走らせた。

「ったく、チョロ松の野郎。ちっとは金になる話でも持ってこいっての」

先程のことで嫌味たらしく愚痴を零す銀時は手慣れた操作でスクーターを運転し、目的のスーパーに向かっていく。

ある程度走らせて、目的地が見えたその時、見に覚えのある人物の姿がスーパーのある側の歩道をゆっくりとした普通のペースで歩いているのを目撃した。

「アレは…おそ松か」

チョロ松の相談の話題に上がっていた件の人、松野家の長男松野おそ松だった。

チョロ松と全く同じ顔と髪型。しかし着ているパーカーはチョロ松が緑だったのと違い、おそ松は赤。しかしパーカーそのものと服の中央にある柄が松野マークである事に関しては完全に共通している。

丁度、銀時と同じスーパーに入るらしく自動ドアを潜って店内に入っていくおそ松。それを見届けた後でスクーターを適当に空いている場所に置き、同じように自動ドアを潜っていく銀時はすぐにおそ松を見つけることができた。

「よぉ、おそ松」

気軽に声をかける銀時だが、返ってきた答えは……。

「え？　あ、銀さん……で会ってますよね？」

「……」

いやに敬語のそれだった。

断っておくが、おそ松という男が知り合いに対し敬語を使うような男ではない。そもそもデリカシーすらない。そんな男が敬語交じりに見ず知らずの他人とでも接するような雰囲気で接するなどありえないのだ。

「あ、あの？」

「え、あ、あーそうだよ？　万事屋の坂田銀時こと銀さんだけど？　つーか、本当に変だよなお前。チョロ松が言ってたけど」

「え？　チョロ松がですか？」

「あー、なんかお前の様子がおかしいってんでどーにかしてほしいって来たんだよ俺ん所に。まぁ確かに変ちゃ変だけどよ、前に比べたらなんかイイ感じでいいんじゃない？」

さも適当に言う鼻の穴を人差し指でほじくりながら言う銀時。

「そ、そうですか？」

「そーそー。知り合いのおでん屋で金を払わずツケを溜めまくったり、四六時中エロい事や競馬とかパチンコに耽って働きもせず、親のスネを齧るしかない寄生虫的存在。それがお前たち松野家の六つ子だろーが」
「そ、そこまでなんですか?」
銀時の言葉におそ松は引きつった苦笑を浮かべる。
「まっ、何があったのかは知らないけどよ。お前もこれで立派な社会人だな」
「は、はぁ……」
「じゃ、せいぜい頑張れよ」
とにかく問題はない。
確かに以前と比べて変わってはいるが、それだけだ。あの雰囲気から察すれば結構まともになったのかもしれないと銀時は判断し、もしもまたチョロ松か、もしくは他の六つ子たちが何か言いに来たとしても絶対無視しようと密かに胸の内で決めてその場を去ろうとした。
「あ、あり?」
突然、形容し難い異様な感覚が銀時を襲う。
そんな今までにない異様な感覚がしたかと思えば、銀時の意識は深く深く、まるで奈落の闇にでも落ちていくかのようにその意識を失ってしまった。

「う……ん。……ここ何処？」

少し寝ぼけたような頭の重い感覚が残りつつも、銀時はその意識を覚醒させて上半身を起こし周囲を見渡す。

まず見慣れない場所ということは理解できた。

周囲には茶色に近い色合いの西洋風の建物があり、時計塔のようなものがある。

銀時はハッキリ言ってこの様な場所に見覚えはなく、忘れているという可能性もあるかもしれないが今の段階では記憶にないのは事実なので仕方ない。

「え、なにココ？」

目が覚めたら見知らぬ建物のある場所…それもどうやら敷地内の芝生の桜木の下で倒れていたらしい。記憶が正しければ銀時は、スーパーで奇妙な感覚に襲われ意識を失った筈。

これに関しては覚えている。

しかしあの時の状況を鑑みればその後は病院に搬送される筈だ。このような場所に寝かせる意味など全くない。考えれば考えるほど、今の自分が置かれた状況が意味不明

過ぎた。

と、ここで銀時は自らの身体の異変に気付いた。

手を見る。何かが違った。簡単に言えば男性特有の無骨さがなくなりり、何処か華奢な印象を受ける小さな両手。

「……え、何コレ？　俺こんな女みてーな手してたっけ？」

更に銀時は気付いた。自身のアイデンティティとも言えなくもないお馴染みの服装が消え、完全に学校や通学路でよく見る女子制服のそれになっている事実に。

「……あれ？　俺こんな格好してったけ？　え

、ちょっ、コレ……女子中か高の制服じゃね

？」

困惑がまるで湧き水のように次々と溢れ出ていく。そして嫌な予想が銀時の脳裏に過る。以前デコボッコ神なる存在を崇める宗教集団が引き起こしたテロで紛れもなく美少女になってしまった過去の珍事件。

思い出されたそれから一つの予想が構築され、ある確認によって現実となった。

確認は簡単だった。運良く手元に落ちてあった制服の内ポケットに入るほどの小さな手鏡を取り、自分の顔を鏡へと覗かせる。

ただそれだけの行為。

「……」

顔を見た瞬間全く言葉が出ず、銀時はまるで石像の如く白目を剥いた状態で固まってしまった。何故なら、普通ならモジャモジャ白髪の天然パーマに死んだ魚のような目。そんな締まりのない男の面が見える筈なのだが、鏡に映るその顔はボーイッシュな短めの茶髪をした、

完全に１０代の少女のそれだった。

当然だが、銀時はこの少女の顔に全く見覚えが無ければ、心当たりもない。

だが唯一、見覚えがある箇所があった。

〝目〟だ。

生気をこれでもかと抜け切った死んだ魚のような両眼。それが彼の中で本能的に……とでも言うべきか。この顔が今の自分の顔なのだと言う事実を手間暇かけず、瞬時に感じ取らせた。

「え、ちょ、マジ……えええええええええええええええーーーーーーッッッッ!!」

この異常過ぎると言っても当然と答えられる状況の中で、銀時はとりあえず叫んだ。

喉潰れるんじゃね？って位に叫んだ。

「ど、どどーすんだよコレェェッ!!　なんで女になってんだよ?!　え、なに、銀さん今度は別人レベルでまた女化しちゃったの?!」

パニックになっているせいか、色々メタい事を平然と吐き出していく銀時。過去に一度女性へ性転換したことがあったが、その時は普通に街中を歩いてた際デコボッコ神教の特殊兵器によるレーザー光線の照射により強制的になってしまったのだ。

無論、自分の意思でそうなったわけではないし、今回も自らの意思でこうなった覚えなど毛頭ない。以前と状況は異なり、突然気を失い目を覚ましたら少女になっていたと言う、ちょっとした『君の名は』状態なのだ。

「ま、マジでやべぇぞコレ。つーか、これ、女化っつーより……ひょっとして入れ替わり系な感じなのか？　アレか？『君の名は』的　な感じで彗星をどうにかしなきゃならねぇのか??」

冷や汗を滝の如く流し、狼狽を顔に張り付かせる銀時。

何とかしようと混乱に陥った頭で元より出来の悪いＩ．Ｑ値を高速回転させ、この状況を打破する術を捻り出そうとするが皆無に終わった。

無理もない。

銀時のやろうとしている行為はとてつもなく広く真っ暗闇の中で当てもなく、ほぼ手探りの状態で目的の物を見つけ出す。そんな無謀同然のもの。無事成功へ至る可能性は天文学的数字になるだろう。

「と、とにかくだ。まずは誰かに聞かねぇと……」

よって銀時は、一先ず誰かを探すことにした。
この建物に詳しい関係者なら今自分がいる場所について分かるかもしれない。あくまで可能性の話だが、しないよりはいいし合理的と言える。
「あれ、こんなとこで何やってんのなぎさ」
立ち上がって誰か探そうとした時、ふと声がかかった。振り向くと自分と同じ制服を着た少女らが2人いた。
「ああ、丁度良かった。ここどこか教えてくれねぇか？」
「え？　どこってベローネ学院だよ。何言ってんのなぎさ？」
ベローネ学院。場所が場所なら名前も聞いたことがない単語だった。
「っていうか……なぎさ、そんな口調だっけ？」
「まぁ、アレだ。イメチェンだよイメチェン」
「それになんか目が死んだ魚みたい……」
「これもイメチェンだから気にすんな。いざって時はもうバリバリに煌めくから」
「そんなイメチェンいる？」
死んだ魚のような目のイメチェンという、訳の分からない返答に苦笑を浮かべる少女ら。対し銀時はいちいち、ごまかすのが面倒とでも言いたげな顔で人差し指で鼻をほじくる。はっきり言って美少女でそれをやるのはどうかと思うが、それを気にしないのが

この男だ。
「こんな所にいたか」
後方から声が聞こえた。
明らかに少女のそれに振り返った銀時の目に入ったのは、1人の少女だった。同じ制服を着ている所見ると彼女もこのベローネ学院の女子生徒らしい。容姿はボーイッシュな雰囲気の美少女な銀時のそれとは違い、何処かの令嬢のような気品を纏っている。
そんな別ベクトルの美少女だった。
「あ、ほのかさん」
「ほのかさんじゃない……桂だぁぁッ!!」
「おめぇぇかよーーーーーーーーッッッッッ!!」
恒例とも言える台詞のおかげで一秒足らずで少女の正体を見抜いた銀時の行動は実に迅速で、的確に彼女の顔面めがけドロップキックを炸裂させた。

バカが集まると大抵碌なことがない。

「で、なに？　なんで俺みたいな状況になってんだよヅラぁ」
「ヅラじゃない桂だ。ともあれ、この異界の地にて友と再会できたのは嬉しい限りだ」
「俺はマジで死ぬかもってぐれーに最悪だけどな、このヤロー」
一方は嬉々と。もう一方は忌々しげに。
そんな場面を作り出しているのは、このベローネ学院一のスポーツ美少女として女子からも絶大な人気を誇る〝美墨なぎさ〟。
窓際の令嬢という言葉が相応しいほどにお淑やかで頭脳明晰。なぎさと互角の人気を持つ〝深雪ほのか〟。
この二人は大変仲が良く、親友と言ってもいい程なのだが、何故かそんな空気とは程遠い雰囲気が二人の周囲を形成していた。

別に仲が悪くなったとか、変な感じなったと言うわけではない。実はこの二人の中身は魂的な意味で別人の存在が彼女らの肉体に憑依した状態となっているのだ。

なぎさの方には、銀時が。

ほのかの方には、桂が。

同じ境遇の者が同じ場所で出会うという奇跡のような再会の出だしから、ほのかになった桂の顔面へ盛大にドロップキックを見舞った銀時はすぐさま桂を掻っ攫い、人の気のない校舎裏側へと連れ込んだというわけだ。

とにかく互いに意見を述べるが全く噛み合っていないのは気にしてはいけない。いつもこうだからだ。

「つーかよ、お前ここが何処だが分かんの？　少なくともベローネ学院なんて場所聞いた事ねーぞ」

単に知らなかったと言うことは否定できないし、学び舎に興味を持つような理由も性癖もないからこそ知らなかった可能性は十分有り得るのだが、しかし桂はその可能性を否定した。

「銀時。お前が知らなかったのも仕方のない話だ。それにここは探そうとして探せる場所ではない」

「なに？　なんかの秘密基地かここ？　学院てのは嘘で実は防衛軍か悪の秘密結社の基

地なんてオチじゃねーだろうな？」
「異世界なのだ、ここは」
「……へ？」
　間抜けな声を漏らす銀時に桂は特に気にも留めず、話を続ける。
「銀時。信じられないのは無理もない話とは思うが、俺たちは原作やアニメの方で猫になったり、またはお爺さんになった身だ。時空を超えて異世界へ魂のみで転移し、このような少女らの肉体に憑依するなど有り得る…」
「ワケあるかぁぁぁぁぁーーーーーーッッッ!!!!」
「ぐぼぉわッッ!!」
　話を遮えるように叫んだかと思えば、銀時は桂の両頬を片手で掴み、タコの口のようにして血走る目つきで迫る。
「なんでタイムスリップじゃなくてワールドスリップしてんだぁぁぁぁぁぁッッッ!!!
　しかも魂だけで?!　ふっざけんなぁぁぁぁーーーーーーーーッッッッッ!!!!!」
「お、おじづげ、ぎんぼぎ。ばばぜば……」
「どう話したって分かんねーよ!!　何コレ？
　ソウルソサエティに行って魂元の身体に戻してもらうかしかねーの？　助けて○護ぉぉーーーーーーーー!!!!!!」

混乱ここに極まれり。そんな言葉が的確な程に銀時の心は困惑と動揺、そして明日への光が見えない真っ暗闇な現状に対する不安が嵐の如く荒ぶっていた。
それはもう、某卍解死神漫画の主人公に堪らず助けを呼ぶ程に…。
「ぶはっ、ええい見苦しいぞ銀時！　それでも侍か貴様は!!」
「侍らしいとこ原作やアニメで碌にしてねー奴が言うなボケ!!」
何とか手を振り解き文句を言うも、銀時はそれを正論の一刀の下に切り捨てた。
「ともかく！　まずは聞け！　……何故、我々がこの世界に来て、こうなっているのかを」
言葉から察すれば、どうやら自分達が何故こうなってしまったのか。その理由に関しての情報を持っているようだ。ならば聞かない訳にはいかない。
「はぁ、分かったよ。その口ぶりなら知ってるっつーことだよな?」
「無論だ。全てはあの日…二日前に遡る」

※

「その日俺は、これまでにない激戦に身を投じていた」
　回想に出て来たのは苦悶の表情を顔に出した長髪の男、狂乱の貴公子こと桂小太郎の本来の姿だった。余程の苦痛がその身を蝕んでいるのか……額に大粒の汗が浮かび、その身体を異常なほど震わせている。
　そして、とうとう口から一筋の血が流れ落ちる。
『な、なんということだ……よもやこの俺がここまで追い込まれるとは』
　だがその瞳に宿る狂乱の炎は消えてなどいなかった。
『だが、負けん！　俺は必ず……この戦いに、勝つ!!』
　敗北などしない。その決意は未だ死の窮地にあって尚、果てることはない。
『そう我が腹を襲いし……この便秘に俺は打ち勝つぞおぉぉぉッッッッ!!!!!!!!!!』
「何と戦ってんだァァァァーーーーーーーッッッッ!!!!」
　ギャグアニメなどでよく見る回想する時の、なんかモヤモヤとしたものを突き抜けた銀時の拳がそのまま、桂の顔面へと清々しいまでに真っ直ぐ的確に打ち込まれた。
「ぐはぁぁッッ!!　な、何をする銀時……俺はただ便秘という悪夢のような敵と戦っていただけ…」
「そんなので一々シリアス風の雰囲気醸し出してじゃねーよ!!　もうめんどくせぇからさ、黙ってくんね？　お願いだよ三百円あげるからさ

!!」

「話を聞け！　肝心なのはこの後だ」

少し鼻血を出しながら、必死に言う桂。とりあえずは聞いておくとして。もしまた何か下らない事を言おうものなら誰の体であろうが構わず、もう一発決めてやる腹積もりの銀時は顎をクイっと前へ出すジェスチャーで続きを催促した。

「では話の続きだ。便秘と激戦を繰り広げる中、突然周りが黒一色に染まった何もない空間と化した」

何もない真っ黒な空間。不思議と妙な近親感を覚えた銀時だが、構わず桂は話を続ける。

「そこで俺は〝あの仙人〟に会った」

「仙人って……まさか〝あいつ〟のことか？」

銀時の中で１つの候補…と言うか、それしかいない人物の記憶が蘇る。

仙人。正確には洞爺湖の仙人と言っていいのか。

銀時の持つ木刀〝洞爺湖〟に宿った化身的な、あるいは精霊的なものか。とにかく一言で表すと〝よく分からない存在〟と答えるしかない５０代くらいのグラサンをかけたおっさんである。仙人というのも勝手に銀時がそれっぽいと言う感じで言ったに過ぎないない為、正式にそうなのか疑問が生じるのだが。

「うむ。洞爺湖の仙人殿だ」
「ま～たアイツかよ。原作とアニメで二回、小説版銀八先生で一回、合わせて三回しか登場しねないモブ野郎じゃねーか。そんなヤツがこんな二次創作に出てまで何しに来たんだよ」
「そう言うな銀時。仙人殿は大事なことを伝えに俺の下へと参じたのだ」
「なんで便所で用足してるタイミングで来るんだよ。もっといいタイミングがあるだろーが」
　銀時が正論を言うものの、桂はそれを気にも止めず話を進めた。
『突然すまないな。我が主の戦友、桂小太郎よ』
『き、貴殿は洞爺湖の仙人殿!!　よもやこんな二次創作にまで出て来るとは……いったいどうしたのだ?』
　恒例のメタい台詞を普通にスルーし、仙人は桂をこの異空間と呼ぶに相応しい場所へ導いた理由を口にする。
『単刀直入に言うが、汝には我が主の銀時と共に異なる世界を救ってほしいのだ!!』
　カッと目を見開き、至極真剣な面持ちで語る仙人。それに桂は戸惑いの声を漏らす。
『こ、異なる世界とは?』
『無理もないことかもしれんが、今は急を要する。詳しいことはいずれ、後ほど話す時が

来る。強制的で申し訳ないがこれも世界間における均衡の為だ』

突然のカミングアウトに桂はただ驚くしかなかった。さしもの桂も異空間へ連れて来られて、突然こんな事を宣う白髭白髪の老人には絶句しかない…

『そ、それはもしや……ディ○○ーラ○ドの事なのかッッッ!!!』

なんてことはなかった。

『え?』

『そうか。とうとう俺もかの鍵の聖剣を手に取り、様々なディ○○ー世界を救う日が今！　ここに来たというわけかッッ!!』

『いや、あの、違うよ?　なったらマジヤバいからソレ。あっちの偉い人たちが黙ってないからね?』

『ならばお供はド○○○にグー○○○で決まりだな!!　仙人殿！　早くキー○○ー○を！』

『ちょ、話を聞いて!!　本当にシャレになんないから!!　』

「とまぁ、こんな会話があって仙人殿から世界を救ってほしいと言う願いを了承したわけだ。

しかし、なんでも俺たちは本来この世界にはいない存在。そのままの状態だと世界の抑止力的なアレによって存在が消えてしまうらしい。そこで、俺たちの魂のみをこの世

界の存在である少女らの肉体に移し、作用を起こさないようにしたというわけなのだ」
「回想の必要性がないんだけどォォ!!　これただお前がキー〇〇ー〇使いになりたいだけの話じゃねーかよ!!」
　全くもって銀時の指摘は正論だった。しかし桂に反省などという字は存在しない。
「そうだとも。故に惜しい。キー〇〇ー〇が手に入ればミッ〇ーと共に戦場を駆け抜けられると思ったのだが……」
「こんな作品がディ〇〇ーとまともにコラボできるわけねーだろ!!　俺たちの心臓握り潰されるわボケがッッ!!!!」
　魂のシャウトと言わんばかりに叫ぶ銀時は叫んだが、確かに色々と心臓を握り潰されかねない位にヤバいのは事実。
　というか、もうこの時点でアウトなのかもしれない。
「それとだな。どうにも俺たちだけでは忍びないということで、何人か助っ人を同じように魂のみでこの世界へ転移させたらしい。無論同郷の者だ」
「あ?　俺らみたいなのが他にもいるのかよ。めんどくせぇーな」
　言葉通り、顔にも面倒さを滲ませる銀時。
　色々と予測不能な事が起き過ぎているせいか、かなり苛立っているようでそれを隠そうともせず、銀時はめんどくさいと不満を呈する。

「そう言うな。何分この世界は全くの未知なる地なのだぞ。人数は多いに越したことはない」
「つーか、その助っ人って役に立つの？　そもそも知ってるヤツなのか？」
「案ずるな。既に接触には成功している。故に言わせてもらうが相手は知己の人物であるし、信頼もできる武士たちさ」
不敵に笑う桂だが、銀時には分かる。
こういう場合、桂という男が自信満々と答える時は必ず最悪な事態が起きるか、あるいは碌でもない事が起きるかのどちらかだと。

※

放課後。
既に日は夕暮れへと差し掛かり、用のない者は帰路へ、部活に励み時間を費やす者は精一杯努力して青春の汗を流している。
そんな時間帯に銀時と桂は、ある場所を訪れていた。

「すまない。みんな待たせたな」
訪れた場所は今は使われていない廃墟の建物。その駐車場には計6人の少女達が屯していた。正確に言えば、桂が来るまで待っていた、と言うのが正しい。
「本当だよヅラ～！　俺ら待ってたんだから」
「フッ、まさか銀時までこの世界へ誘われようとは……まさにＦａｔｅ！」
「うっさい黙れクソ松」
「にしても有り得なくない？　僕等がこんな可愛い女の子になるなんて」
「そうだよね～嬉しいと言えば嬉しいけど、
なるってのはね～」
「ハッスルハッスル～!!」
一人目は一見すると少年と見間違う程に一国の王子様の如き魅力を出しつつも胡座をかいている赤髪の少女。
二人目は青く長い髪を特に結わずにそのままストレートにした髪型で何処か委員長的空気があるのだが、かなりイタい台詞のせいで台無しになってしまっている。
三人目は青髪の少女と同じくストレートな髪型だがこちらは紫色をしており、その目つきを鋭くさせ、まるで獲物を狙う猫と言わんばかりの凶悪さで睨みを効かせる。
四人目は緑色の髪をボブカットにした少女で今の現状に対してどうやら不満を抱い

ているようだ。
五人目はそれに同意したピンクの髪をチョココロネのような団子状に纏めた少女。
やはり緑の少女と同じく不満の溜息を漏らしていた。
六人目は最初の赤髪の少女と同じくボーイッシュな茶髪の少女。両腕でガッツポーズし、元気溌剌さをアピールしているかのようだ。
皆何とも言えない個性の強い面々だが、銀時には1つの納得感があった。
確かに彼女らの顔は今日初めて見る顔だ。
だが、言動や仕草は銀時が認知する知り合いの中でベスト・オブ・クズと称されかねない程ニートでしょうもない六つ子の兄弟の、まさにそれだった。
「このクソ松がァァァァァーーーーーーーーーーーーーーーーーッッッ!!!!!」
「べぶらぁぁぁッッ!!!!」
的確なキックが赤髪の少女…正確にはその顔面を捉えて、見事に命中した。
「痛ってーよ!! バカじゃねーの! マジでバカじゃねーのオイ!!」
「バカのなのはテメーだゴルァッ! なんで、なんでお前ら?! もっといい人材いたよね? テメー等クズ・ニート・バカの三拍子揃ったアホ共でどうしろっつーんだよ?!」
「オーオー、落ち着けＦｒｉｅｎｄ」
怒鳴り散らす銀時を見かねてか青髪の少女…正確には、中身だけ松野家次男のカラ松

が説得を始めた。
「いいか、こんな状況でｐａｎｉｃ且つｓｈｏｃｋになるのは分かる。大いに分かるとも。だがここはｃｏｏｌになることが大切なんだ。氷の如き…いや、まさしく冬の季節のようなｃｏｏｌ　ｇｏｏｄな思考じゃなきゃ、Ｂｅｓｔ　ｉｄｅａは生まれない。
そう、誰しも人は不完全。Ｎｏ　ｐｅｒｆｅｃｔなんだ。けどそれでも俺たちは逆境の中を進まなくちゃいけない。いけないんだ……だって俺達は、やっぱりＮｏ　ｐｅｒｆｅｃｔ…」
「ノー・パーフェクト二回言うなァァァァァ!!!!!!」
「中村ァァァッ!!」
その拳に聞くに堪えない説得術を長ったらしく聞かされた苛立ちと、カラ松という存在に対しての不満とウザさと切なさ、他になんか色々とを込めて。
銀時はガチのグーでカラ松を殴った。
「ったく、ちょっと期待して損したぜ。よりによってコイツ等とかもう世界滅亡レベルで終わってんだろ」
「散々な言い方なんだけど!!　自覚はあるけどさ、そこまで酷く言わなくもいいだろ!」
銀時の散々な物言いにさしもの三男チョロ松は非難の声を上げる。
ちなみに緑の髪の少女が彼である。

「まぁ落ち着け銀時。まだ頼れる同郷の友はいるぞ」
「こんなクソニート共が出て来た時点で信用できねーよコラ」
「なに、もうじき此処へ…」
桂が言い終わる前に何かが銀時達の前へ降り立つ。
異形。眼前に現れたソレはそう表現するしかない存在だった。
二体いて、一体は人型ではあるものの筋骨隆々という言葉が相応しい程赤い肉体を筋肉で膨張させ、その姿はまるで蚊を彷彿とさせる虫の怪人。
もう一体はスレンダーな白亜の身体で、シルエット的に言うと何となく、あの台所に出て来そうなGっぽい感があるのが否めない。
「ちょっとぉぉぉぉぉーーーーーーー!!!!!　何よGって?!
せめてSかMにしないよ！」
「そういう問題?!　つーか、ナレーションにツッコミ入れるもんじゃないぞ、くノ一女！」
銀時は察した。この時点で2匹の怪物の正体を。聞き覚えのある台詞や声から容易に割り出したのだ。
「オィィィィィーーーーー!!!!!
ただの変態女にゴリラじゃねーかッ!!」

テラフォー〇ー的な蚊の怪人…近藤勲。
白いG的なアレ…猿飛あやめ。
銀時の世界において〝ストーカー〟の異名を無意味に背負った二人だった。